

第三百三十回 青葉会

平成二十五年九月二十六日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか

〈投句〉

中野一灯 福島正明 山崎亜也 山内天牛 伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

身に入(し)むや未だ壮(わか)かりし詩友逝き
敬老日七年先もお達者で

万里子 (堅・紀・允・く)

全 (龍・灯・青)

木道を番(つがひ)蜻蛉に追ひ越され

全 (ゆ・亜)

(尾瀬)

みんなのみんな数へつつ嬰(こ)と夢路

全 (啓・亜)

リハビリへ鳩吹く風に励まされ

全

《互選句》

七点

☆ 空稲架(からはぎ)に作務衣干しあり寺領田

一灯 (万・恭・孤・啓・く・青・天)

石川清氏を悼む

六点

山に立つ人秋光の包みけり

ゆたか (紀・五・敏・灯・亜・三)

五点

☆ 生き延びて二年目の朝茸汁

忠彦 (万・紀・弘・ゆ・隆)

(隆：上五・中七↓長らひて二年(ふたとせ)の朝)

☆ 啄木鳥のこだまに森の朝動く

孤舟 (万・猛・弘・敏・允)

☆ 色鳥や倒れ木の堰く沢伝ひ

一灯 (万・紀・恭・五・天)

南平和夫氏を悼む

四点

☆ 三十年病(やまじ)身に添ひ秋に逝く

猛 (万・堅・紀・忠)

☆ 台風過庭掃く妻の白髪かな

忠彦 (万・ゆ・啓・く)

名月を浮かべ大河は海めざす

孤舟 (猛・五・敏・三)

(和夫さんを追悼)

鉄路延ぶ白く刷(せ)かれし秋の空

五郎太 (堅・忠・敏・青)

追悼石川清氏南平和夫氏

銀漢へ別れがたなし汽車送る

弘子 (堅・忠・五・亜)

(☆：「リ」↓「S」)

風を詠み水を唱ひて秋に入る

堂哉 (忠・弘・允・啓)

伊那晴れてはずす林檎の掛袋

一灯 (猛・孤・青・天)

モンゴルに来て底抜けの星月夜

昇 (恭・龍・ゆ・灯)

三点

☆ 名月を撫でるパベルの摩天楼

健介 (万・敏・ゆ)

待宵や携帯かけて声聞けり

五郎太 (弘・隆・正)

遺言を書けば興乗る秋灯下

恵洲 (忠・隆・く)

熊の湯は旅の二日目ななかまど

堂哉 (猛・啓・天)

☆ 二歳の児花笠音頭に踊り出す

ゆたか (万・紀・龍)

アルプスの嶺を越えゆく天の川

昇 (敏・ゆ・允)

毬栗や都会に多き引籠り

正明 (弘・天・三)

てれび消し一人の酒や虫の夜

規雄 (堅・忠・隆)

東京で五輪ふたたび赤とんぼ

天牛 (恭・正・三)

ゴシックは選者の天

捨案山子昭和の空虚抱きしまま

盛雄 (猛・啓・亜)

三津五郎病休

休演に戦(まの)く梨園秋曇

紀久男 (正・く)

悼石川清氏

まん丸の面差し浮かぶ今日の月

弘子 (猛・允)

悼南平和夫氏

☆ 満月へ二日を待たず逝きにけり

全 (万・孤)

秋彼岸迎る系図の旧漢字

一灯 (孤・天)

白桔梗拒否権丈は持つてゐる

正明 (孤・允)

☆ 途切れ途切れの内緒話や百日紅

全 (く・三)

☆ 雨風に香具師店畳む秋祭

天牛 (万・孤)

秋草や山を愛せし清逝く

全 (恭・青)

中華鍋振るふ主の店溽暑

全 (龍・亜)

原子の火消えてはかなき祭笛

盛雄 (五・正)

眠られぬ夜長の友はチェロソナタ

そらお (紀)

富士の峰間近に見つつ花野行く

全 (隆)

肝臓数値下がりにて求む新走(あらばしり)

紀久男 (灯)

十五夜に喪主と偲ぶや友の通夜

全 (弘)

漸くに新涼来たり眠れる夜

猛 (堅)

名月やプラントホームで電車待つ

恭延 (龍)

異常気象忍びし今朝や秋気満つ

全 (隆)

☆ 老犬の鼻で径知る草の露

忠彦 (灯)

☆ もしかして去り状秋の落し文

孤舟 (万)

星月夜宇宙遊泳する胎児

全 (隆)

ブーシキン・フランス絵画展

秋日和「レジエ・労働」の前に立つ

五郎太 (正)

そこは陽の当るところか曼珠沙華

弘子 (青)

(青：何となく往年の名画「陽の当る場所」を憶い出させる佳句)

晩年の思ひ身に入む昼の酒

恵洲 (灯)

近頃は日本酒ばかり酔芙蓉

正明 (三)

亡き人につながる思ひ秋の雲

規雄 (恭)

残る蚊をウインドあけて逃がしけり

亜也 (隆)

鯊舟や巴水の堀にもやひせり

全 (龍)

月明や麻布の崖をそぞろして

全 (五)

ついそこもタクシー使ふ炎暑かな

天牛 (正)

● 次回青葉会

十月二十四日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲ 当季雑詠五句 投句二句

十一月二十八日(木)

以上 文責 紀久男

平成二十五年九月句会報

一 石川清さん（78歳）が9月10日に、南平和夫さん（76歳）が17日に急逝されて、すぐの青葉会。在京の常連殆どが出席：先生以下13名。投句7名。

お二人への献杯で開始。披講に入る前に、お二人が亡くなられる前後の状況を小生が報告しました。（後述）。お二人の遺句そして追悼句は特集して墓前にお供えする予定です。

寄贈は先生から「南瓜最中」（調布の藤屋）、弘子さんからガレット（代官山シェ・リュイ）、正明さんから純米「遊佐来」（山形）、忠彦さんから純米大吟醸「獺祭」（岩国）、小生の煎餅（京・末富）と餅のどら焼（代々木八幡・古賀音庵）、純米「メ張鶴」（新潟）

二 関係者近詠

萬緑の馬場に朝駆け見まく欲し 万里子 浴衣着て短冊書ける三津五郎 紀久男

深緑や昭和史著き学習院 全 七夕の竹立つ隣家孫来る 忠彦

奄々と木の根の階溽暑かな 全 「萬緑」10月号 梅雨空やベッドの白が目に沁みて 規雄

池底まで萬緑映り鳥語降り 全 「NHK俳句」10月号 鈴木章和選

学林に墨絵のやうな夏茸 全 秋晴れや山巖濃くす六甲山 堂哉

鮎める馬らへ赤い扇風機 全 眞希子 鯛雲身を寄せ合ひて伊吹越ゆ 全

旅の地の教会眩し雲の峰 全 煩惱を揺らす如くに曼珠沙華 啓子

喪服着て親族の末席炎天下 全 精進落しつまみ頼まず新酒かな 紀久男

少女期へ堅き鼻緒と初浴衣 全 爽涼や樹林にぼつり蕎麦どころ 大手明男

ひらひらと白服の来る京都駅 全 弘子 爽やかに掛け声きめて喜ばれ 紀久男

人恋し棘柔き夏薊 全 有楽苑如庵 残暑おしバーボン呷るジャズライブ 全

飛石へ青毬栗を戻しけり 全 紀久男 「尋求既往」（失われた時を求めて）

夏襟の花街搗ち合ふ楽屋かな 全 プルーストを象形文字に秋書展 全

三 黒南風や買物無事の妻を待つ 清

6月27日頂戴しました最後の投句です（FAX&TEL）。一人息子を山の遭難事故で亡くされ（学生）、趣味の山登り、日本古代史研究、俳句の傍ら、持病の病院通ひ。前立腺癌はほぼ治つたようですが、大腸・肝臓に転移した癌の発見が遅れ、命取りとなりました。掲句は主治医に余命6ヶ月を告知され、抗癌及び延命治療拒否の決意された時に詠まれました。最愛の奥様へのお気持ち痛切です。

7月句会席上、色紙にお見舞いの寄せ書きをしてお送りしました。8月、聖路加のホスピス病棟に入られ、わずか一ヶ月足らずで他界されました。天牛さんお見舞いに行かれた際、痛々しいご様子でしたが、頭はとてもはつきりされておられた由です。仕事の話はせず、同期の友人そして青葉会の皆様に宜しくと。句会のあと飲んだ話を楽しそうにして懐しがっておられたそうです。

四 田植每里山緑深まれる 和夫 ●丘の上眺める車輛夏の陽 全

6月26日FAXでお届け下さった最後の投句です。昨年7月大動脈瘤乖離で平塚の病院に入っておられました。永年のパーキンソン氏病で手術受ける体力無く長期療養中でした。隣り町の茅ヶ崎にお住いの奥様や息子さん一家らがよく見舞っておられました。

亡くなられる前日までお元気（寝たきりですが）で、その気配も無かつた由です。6月に入つてから言葉が全く聞き取れなくなり残念ですが「最後の投句になると思いますが」云々で、先生はじめ皆様に呉々も宜しくとの文面でした。

●病室の実感わかぬ金婚式 和夫

告別式で挨拶された御長男が披露された遺句です。（5月投句）。赴任されたビルマ（現ミャンマー）で発病されて30年。ご本人はもとより奥様の介護のご苦労された歴史が偲ばれます。有名な鉄道趣味のほかに書道や俳句にも打込んでおられ、芝居見物、句会にご家族同伴で来られたこと等が思い出されます。

石川清さん、南平和夫さんお二人の永年に亘る御厚誼を謝し、謹しんでご冥福をお祈りする次第です。

平成二十五年十月十日

紀久男記